

【演題】

龍溪性潜禅師と黄檗宗の開創

（発表者 中国重慶大学研究員 楊慶慶）

日中両国間には悠久なる文化交流の歴史があります。歴史上、数えきれないほど両国の多くの僧侶が文化交流の架け橋となり、いずれも大きな役割を果たしています。中国では、鑑真や蘭溪道隆など、日本では、空海や道元など、日本で、それぞれ新たに一宗派を開いただけでなく、さまざまな中国文化をも日本で広めていきました。仏教の僧侶は日中文化交流にあって重要な使者となり、歴史的に深遠なる影響を及ぼしていました。



承応 3(1654)年、中国明末清初の高僧隠元隆琦(1592 1673)は日本へ渡来しました。寛文元(1661)年、京都宇治で黄檗山萬福寺を建立し、日本黄檗宗の開祖となっています。隠元の渡来及び黄檗宗の開創は日中仏教文化交流史、日本近世仏教史、日本禅宗史等の史的側面にあつて、いずれも特筆すべき大事件であつたと言えます。隠元以後、中国仏教の日本への伝来は見られず、現在に至るまで中国僧による日本での開宗は行われていません。柳田聖山氏も「黄檗は近世日本の、新しい東大寺である……近世日本の動きは、どの一面

をとってみても、黄檗文化の影響なしには解釈できない」と指摘しました。とりわけ黄檗を新しい東大寺にたとえて、それらが近世日本の各方面の新たな動きに及ぼした影響を高く評価します。

十七世紀、東アジア世界において最大の政治変動は明清の政権交替と、スペイン・オランダ・イギリスなど、それまで日本貿易の中心的地位にあったポルトガル以外の勢力が相次いで日本貿易に参入しました。複雑な事態で、日本の対外関係に大きな影響をもたらすこととなりました。1639年、日本では鎖国時代が始まり、日本の対外貿易は長崎に限られるに至ります。近世中国仏教もこのようにして、移民と共に、中国から長崎に伝えられたのです。媽祖祠堂から発達したいわゆる「唐四寺」(長崎四福寺)もその背景のなかで創建されました。隠元は長崎興福寺住持の逸然性融(1601-1668)からの四回目の招請を受けて、三年後帰国するという約束で、日本へ渡来しました。

近世にあっては、日本仏教界ないし各界で、積極的に、外来の思想や知識を吸収する気運があります。出版業が相当な発達を遂げており、実は隠元の語録は、彼が日本へ渡来する以前に既に日本で刊行されていました。その結果、隠元の存在や禅風については、一部の僧俗の間ではかなり知られていました。隠元の渡日は、日本で大きな反響を起こしました。民衆や多くの僧侶が長崎へ行って、盛況を呈していました。

龍溪性潜(1602-1670)は当時日本臨済宗の大本山妙心寺の住持でした。隠元に会う前から、龍溪も偶然に、隠元の語録を読むチャンスがありました。それは天啓に導かれた運命のような出会いであったと考えられます。隠元の語録を読んで生まれた隠元への尊崇の気持ちは後の隠元支援への萌芽となっています。隠元の渡来のことを知って、龍溪が大変喜んで、竺印祖門(1610-1677)、禿翁妙宏(1611-1681)等と隠元を妙心寺に招請しようとする運動が起きていました。しかし、妙心寺内で、愚堂東寔(1577-1661)をはじめとする妙心寺の反対派の対抗で、失敗に終わりました。



しかし、龍溪は諦めずに、自分の住持した普門寺に隠元を招請する運動を続けました。明暦元（1655）年五月に、幕府では龍溪・禿翁・竺印らが隠元を普門寺に招請することについての請願を許可しました。最初のうちは幕府から警戒されていて、行動上何の自由も与えられていませんでした。しかし、龍溪らからの斡旋により、厳しい制約のもとではありましたが、隠元にもある程度の自由が与えられるようになりました。

一方で、渡来二年後の明暦2（1656）年、隠元に帰山を促す書簡が相次いで送られてきました。七月、それらの書簡の中でも、隠元から林月樵へ宛てた返信には、「奈寺主之願未レ滿。仍率二大衆一懇留再四。難レ卻二其誠一」（現代語訳：寺主の願いはまだ満たされていない。大衆を率いて再三再四私を慰留する。その誠意を退けがたい）というような記述が見られます。ここでいう「寺主」とは龍溪を指します。隠元は古黄檗のことや三年で帰国するという約束を忘れずに、帰山しようと思ったものの、龍溪らが再三再四にわたり慰留したということが分かります。

明暦3（1657）年、龍溪は何回も江戸へ赴いて、大老酒井忠勝（1587 - 1662）を初め、老中らを歴訪し、隠元を引き留めることについて懇願し、かつ隠元に紫衣を授けるよう奔走しました。万治元（1658）年、龍溪の斡旋で、隠元は將軍家綱（1641 - 1680）に謁見するに至りました。万治2（1659）年、龍溪は再び江戸へ赴いて、斡旋しました。酒井忠勝からは、將軍のほうは隠元の高齢を考慮して、京都付近に寺地を下賜するというような幕府側の意向が伝えられたのです。かくて隠元は、ついに日本に留まることを決心しています。宇治黄檗山萬福寺が創建されている時、家綱は寺地や造営費、資材を支援しました。なお、当時の幕閣の中心にあった大老酒井忠勝は、龍溪らの滞留運動に対して、始終積極的な姿勢を取っており、その逝去に際し、遺言して黄檗山に法堂を寄進しています。

万治3（1660）年12月18日に、古黄檗から名をとった黄檗山萬福寺が宇治大和田の地に新たに建立されました。もともと宇治大和田は後水尾法皇（1596 - 1680）の生母である中和門院前子の別荘のおかれた所として知られていました。法皇は龍溪との交流が深く、ついには龍溪に嗣法していました。萬福寺が宇治大和田の地に建立できたのは、法皇と龍溪の深い関係のおかげでしょう。

龍溪を通じて、法皇は隠元にも深く帰依していました。さらに隠元に仏舍利5顆と舍利塔を賜り、隠元が示寂する前には、「大光普照国師」の号を贈りました。



何回も帰山の念を抱いた隠元を引き留めるべく、そのすべてを促進したキーパーソンこそは龍溪です。龍溪の奔走がなかったのなら、隠元は恐らくそのまま中国へ戻り、日本において黄檗宗が開かれたはずもないでしょう。新寺の建立が制限されていた近世初頭のきびしい宗教政策のもとで、それでも京都に萬福寺が建立されたということは、もとより幕府側の隠元への好感もあったことでしょうが、それ以上に龍溪はキーパーソンとして幕府側へ積極的に働きかけ、幕府上層部が隠元を引き留めに動くよう奔走したことも無視できないのではないのでしょうか。

一方で、愚堂の剣幕にも似た鋭い隠元批判に感化されてか、隠元に付き従う妙心寺関係者は龍溪を残すのみとなりました。竺印や禿翁も隠元のことから手を引いています。しかし、妙心寺内の親檗派の龍溪らと反檗派の愚堂らとの対立がなかったならば、隠元はごく順調に妙心寺に住持して、黄檗宗の開立にまでは至らなかったことでしょう。

黄檗宗の開立はやはり千古の盛事です。その偉業を成し遂げるには、日中両国からの多くの支援がありました。特に日本にあつては、皇室と公家、幕府と大名等の日本側の上層社会から隠元等一行へ惜しみなく支援がなされましたが、その背景には彼らの龍溪への信頼があったことを見落とせないでしょう。隠元への尊崇の念を持ちつつ、日本臨濟宗を振興する期待を抱いたために、龍溪は時として日本臨濟宗からの誤解や排斥を受けながらも、隠元のために奔走し、黄檗宗開宗という偉大な事業を成し遂げることを、われわれは忘却することはできません。龍溪のために隠元は日本にとどまる決心をし、黄檗宗の開創や日本で弘法、いわゆる黄檗文化を通じて、四百年近くに及ぶ日中文化交流が、今日に至るまで継続されているのです。

今でも、黄檗は日中友好交流の証であり、その存在自体が後世の人々にその歴史を忘れないよう常に注意し、世代を超えて日中友好交流のために共に努力し続けるよう激励しています。